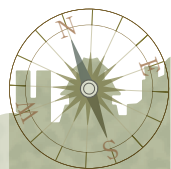


May
号外
2015

過去と現在を行き来しながら、
未来を考える壁新聞

上町台地
今昔タイムズ



上町台地 今昔フォーラム

vol.3 Document



企画・編集 U-CoRoプロジェクト・ワーキング / 発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)

問合せ先 tel.06-6205-3518 (担当: CEL弘本) ※U-CoRo=ゆーころ (上町台地コミュニケーション・ルーム)

ホームページ <http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/ucoro/index.html>



- 日時: 2015 年3月14日(土) 14:00 ~
- 場所: 高津宮 (大阪市中央区高津1) 末広の間
- 主催: 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
企画: U-CoRoプロジェクト・ワーキング
- プログラム: コレクション・トーク
講師 橋爪節也氏 (大阪大学総合博物館 館長)
質疑&持ち寄りトーク

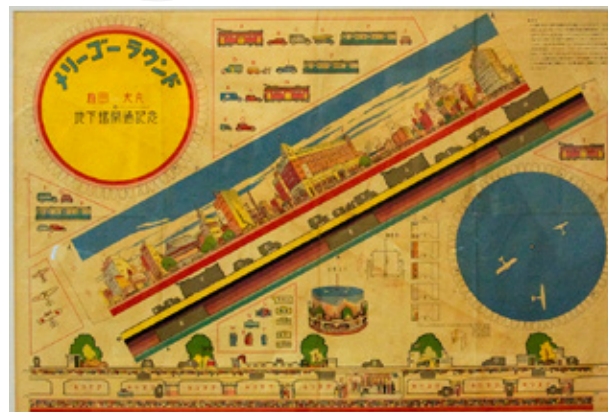


第3回「上町台地 今昔フォーラム」を開催。 テーマは「とっておきのコレクション・トーク 憧れの百貨店・商店街と大阪の都市居住文化」

U-CoRo Step 2
壁新聞プロジェクト
関連イベント



▲壁新聞「上町台地今昔タイムズ」
第3号(第1面)



過去と現在を行き来しながら未来を考える「上町台地・今昔タイムズ」第3号では、まちと暮らしの変容を、百貨店や商店街での子ども時代の思い出話から垣間見ていくことを試みました。憧れの空間でもあった百貨店や商店街との交わりの情景のなかに、まちに住む人によって支えられてきた、大阪の暮らしと文化のありようが浮かび上がってきます。

今回のフォーラムでは、近代大阪の都市文化に関する橋爪節也先生のコレクションから、往時の百貨店・商店街にまつわる貴重な資料をご紹介いただき、参加者からも価値ある証言の数々が寄せられました。コレクションと語りを通して、参加者の記憶が呼び起こされ、都市居住文化のこれからのありようを考える機会になりました。

※「上町台地・今昔タイムズ」のバックナンバーやプロジェクトの歩みは、ホームページ「大阪ガスCEL」「U-CoRo」で検索してご覧いただけます。



- ①梅田一大丸 地下鉄開通記念メリーゴーラウンド (P.5) ②滑稽漫画 大阪見物 絵はがき 千草かずのぶ作画
- ③喫茶 キューカンパー チラシから (P.9) ④心斎橋筋案内表紙 (P.3) ⑤鉄橋心斎橋の立版古 (P.4) ⑥大丸 全館完成店内ご案内 (P.5) ⑦心斎橋筋案内に描かれた 心斎橋筋商店街

コレクション・トーク 〈講演ダイジェスト〉

「憧れの百貨店・商店街と大阪の都市居住文化」



橋爪節也氏

(大阪大学総合博物館 館長)

はしづめ・せつや

1958年大阪市生まれ。東京藝術大学大学院修了。東京藝術大学助手、大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を経て現職。近世近代の美術史を研究し、編著書に『モダン心斎橋コレクション—メトロポリスの時代と記憶』（国書刊行会）、『モダン道頓堀探検』（創元社）、『映画「大坂」観光の世界—昭和12年のモダン都市』（大阪大学出版会）など。



※掲載図版のうち、提供先を明記したもの以外は、橋爪節也氏蔵のコレクションからのものです。

自分の記憶を大事にして、そこに一度立ち返る

最初に、自分自身の記憶の話から。これは、私と弟の子どもの頃の写真です①。大丸の旗が見えているので、たぶん昔のそごうの屋上。橋爪の家はペンキ屋をしていて、そごう心斎橋店の出入り業者でした。年代は昭和40年代の前半頃か。アロハみたいなかつこうで、いまだにこういうファッションセンスが抜けません(笑)。

今年は大坂落城400年。大大阪誕生から90年で、もうあと10年で100年です。その大阪というのは、いまでもイメージで言われすぎている。こてこてとかお笑いか。私はそれがすごく気になる。これに対して、それぞれが自分の記憶というか、そういうものを大事にし、いま一度立ち返る必要があると思います。

この前、文楽のシンポジウムで、ある先生がこう言われた。「東京の人は偽善で、大阪の人は偽悪である」と。東京の

① 子どもの頃の橋爪節也氏と弟の紳也氏の写真（昭和40年代前半頃か）を掲載した雑誌表紙



人はええかつこするが、大阪の人は偽悪ぶる。「大阪なんかしょうもない」、「こてこてでっせ」、「きたないもん何でも引き受けまっせ」と。偽善にはまだ「おまえは偽善者か」と言えるが、「偽悪ほど手に負えんものはない」と(笑)。

詩人の小野十三郎さんも、昔そういうことを書いている。劇作家・菊田一夫の「がめつい奴」がえらく流行ったけれど、「がめつい」というのは、大阪言葉には本来ないと。けれど、大阪人は「がめつい奴」だと、多分全国的に思われている。最近



② 戎橋上の幼少期の橋爪節也氏（昭和35年頃か）※講演当日のスクリーン画像から

は「おもろい奴」に変わってきたかもしれないが、そういうところを、もっとクールに反省してみた方がいい。うまく誇張しないといかんなあと思う。

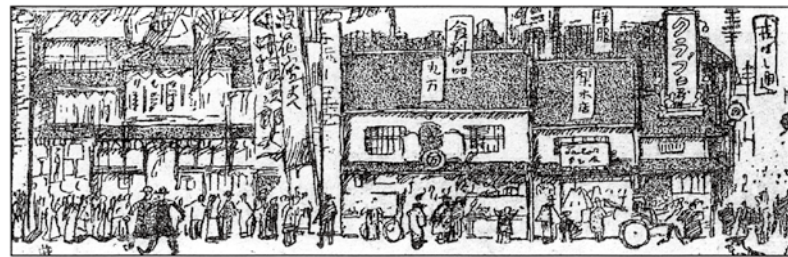
次の写真は、戎橋の上にいる私で、多分、昭和35年頃②。個人的には道頓堀の戎橋はこういう感じの場所。

既成のイメージを越えて、大阪の街を捉え直す

モダン道頓堀ということでは、大正・昭和初期の「道頓堀」③という雑誌が

面白い。当時の画家とか作家とか、そういう人たちがまとめて出したもので、道頓堀の店を一軒一軒、描いたイラストがある。

例えば、この頃に道頓堀にあった「丸万」は、魚のすき焼き「魚すき」で有名だった。ところが、同じ道頓堀の



③ 雑誌「道頓堀」第18号（大正9（1920）年8月）と同誌掲載の大正時代の道頓堀を描いたイラストの部分（戎橋筋から浪花座のあたり）

「京与」では「沖すき」を出した。商標登録しているから「魚すき」とは言えなかったからで、これは丸万さんから聞いた話。

また、「石川呉服店」というのが道頓堀にあった。2階建てくらいだが、『大大阪画報』（昭和3（1928）年）には百貨店として出ている。クイズとして、道頓堀に百貨店があったかなかったかという、とりあえずあったわけです(笑)。

道頓堀については、小林秀雄が「モオツァルト」という有名な評論の中でこう書いている。「もう二十年も昔の事を、どういう風に思い出したらよいかわからないのであるが、僕の乱脈な放浪時代の或る冬の夜、大阪の道頓堀をうろついていた時、突然、このト短調シンフォニイの有名なテエマが頭の中で鳴ったのである」と。

昭和初頭の頃の光景。これは、我々がいま持っている道頓堀のイメージとちょっと違う。このあと、小林秀雄が何をしたのかという、百貨店にレコードを探しに行った。その百貨店がどこなのか？ 石川呉服店かも知れないが、そうではないかも知れない。私、本業は美術史ですが、こうした細部が、ものすごく気になる(笑)。

「法事」としての、モダン心斎橋の展覧会

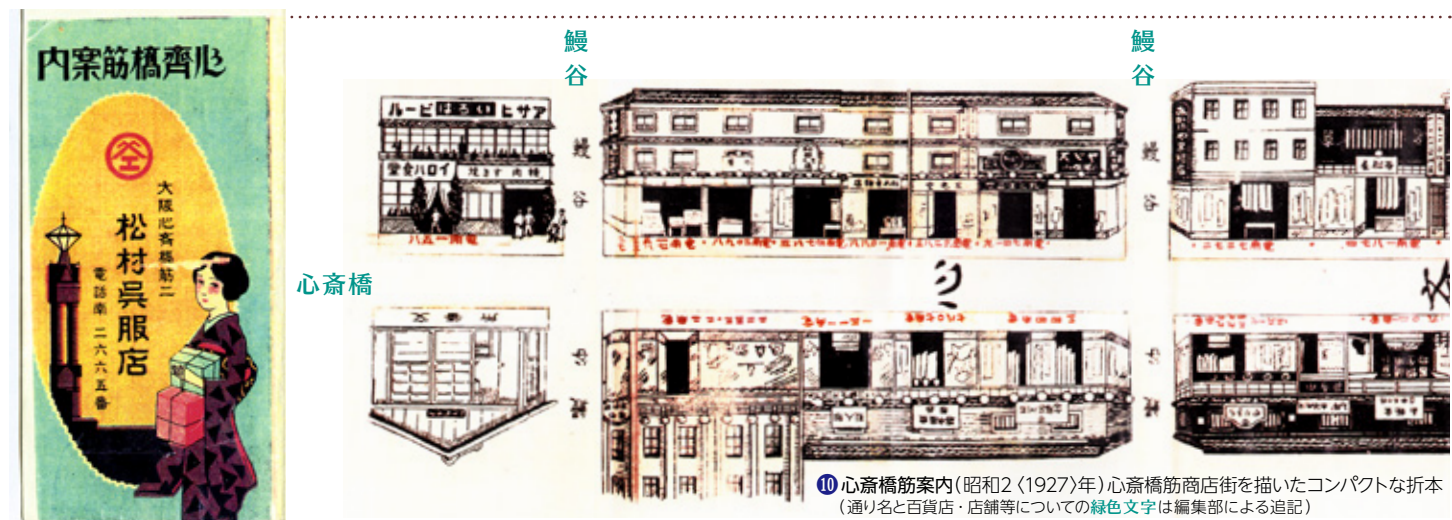
平成9年、心斎橋の商店街主催で、地下鉄鶴見緑地線の延伸と、地下街「クリスタ長堀」のオープンを記念した「心斎橋筋の文化史展」が開かれています。

平成17年には、いまは新美術館と言っている大阪市立近代美術館建設準備



④ 〈モダニズム心斎橋展〉会場
島野三秋による、そごう大阪店のエレベーター扉を見る人々

⑤ 雑誌「大阪人」（2005年2月号）「モダニズム心斎橋」を特集



室の分室が元の出光美術館のところにあった頃に、大大阪誕生80年で「モダニズム心斎橋」という展覧会④をやりました。これには、そごう大阪店の螺旋のエレベーター扉をはじめ、大阪ゆかりの画家たちの作品や大丸の冊子やパンフレット等も展示した。

そのときに図録代わりとして、雑誌「大阪人」の2月号で「モダニズム心斎橋」⑤を出している。

このあと、大阪ガス エネルギー・文化研究所の季刊誌「CEL」76号に、「街の記憶へのタイムトラベラー〈モダニズム心斎橋展〉とは何だったか」という原稿を書いています。

実は、この展覧会とはとにかく会場が

やかましかった。普通は、美術展というと、学芸員が解説しているだけでも、静かに鑑賞しているのにうるさいと怒る人もいる。それがこの展覧会では、頼みもしないのに、解説する人がいる。初めて会ったような人が「ここ、おばあちゃんの家やねん」というような話をする。これは新しい美術展。それが人と人をつなぐ展覧会の一つの機能ではないかと思えた。つまり、これは「法事である」と。死んだおじいさんの何回忌かが始まると、おばあさんは、「うちの人は困った人で、遊んでばかりだった」と言うかと思うと、子どもは「こわいおじいちゃんやった」と言う。孫は「優しいおじいちゃんやった」と言い、友達は、「あいつは、ほ

んまに悪やったで」と言うかも知れない。それぞれ、記憶、思い出が違う。人によって立場によって異なるものが積み重なってできあがっている。展覧会というと、答えが一個のような錯覚があるようだが、そういう記憶を展覧会の空間の中に持ち寄ってクロスさせる。つまりそれが「法事なのである」と。

心斎橋に関する展覧会では、そごう大阪店で「モダニズム心斎橋」を同年（平成17）の1月から3月までやっていた。次に、同年9月から、そごう心斎橋本店の再オープンで「心斎橋物語展—煌めくモダニズム」が行われた。このときに私は『モダン心斎橋コレクション』という本を出しています。

ここは江戸期からの文化の街

その本にも紹介しているが、江戸時代には心齋橋は出版の街で、絵草紙屋などが並んでいた。また、江戸時代後期



⑥ 天保山名器蓬菜形畧図 (「天保山名所図会」天保6(1835)年)



⑦ 橋爪氏が作成した「天保亀」の模型

の人気文筆家だった^{あかつきのかねなり} 曉鐘成は、心齋橋筋の南久宝寺町あたりで「鹿廻家」という土産物屋を開いていた。『天保山名所図会』という本があって、その広告に鹿廻屋の土産物が出てくる。昔の^{みおつくし} 澤標の破片を使った工芸品とか、東大寺の宝物の複製、歯磨き粉ならぬ「目磨き粉」などがある。なかでも、「天保山名器^{ほうらい}蓬菜形畧図^{りやくず}」(⑥)は、天保山の形をしており、一名“天保亀”と言った置物。私は、ブロンズ粘土を心齋橋の「カワチ画材店」で買い、それを再現^⑦して、そごうの展覧会場に置いたら、「ああいうのが残ってんのやなあ」と勘違いする人も出た(笑)。

心齋橋界隈に生まれたモダン回廊を周遊する

明治6(1873)年、鉄橋の心齋橋が架けられます。長谷川小信が描いた鉄橋心齋橋の立版古^{たてばんこ}がありますが、立版古は、紙を切り抜いて組み立てるもので、これを近年、心齋橋の「中尾書店」から復刻して再現しました(⑧)。



⑧ 心齋橋の立版古 (中尾書店復刻版)を組み立てたもの

いますが、別の「心齋橋案内」では赤くなっている店がまた違う。つまり、その店の宣伝用に注文に応じてつくったもの。

昭和10(1935)年の『写真心齋橋』(⑪)は、心齋橋の街灯が電化してきれいになったときに出したものらしい。表紙から電気のネオンがデザインに使われている。この中にも地図があり、どこにどんな店があったのかがわかります。空白のところは、お金を出さなかったのでしょう(笑)。南の三津寺筋あたりには、「小大丸呉服店」、「丹平薬局」、向かいには「をぐらや」と、有名店が並んでいる。

この当時の心齋橋筋の写真には、道の上に糸のようなものがたくさん見えているのがあがる、それは「雨よけ日よけ」を引っ張るためのもの。「浪花小唄」で

“いとし糸ひく雨よけ日よけ♪”と歌うのは、この心齋橋筋商店街にあったもののこと。歌は“てなもんやナイカナイカ道頓堀よ♪”と続いていく。実は、雨よけ日よけは戎橋筋や千日前にも設けられていたが、道頓堀にはなかった。

梅田-大丸(?)間の地下鉄開通記念

「梅田-大丸 地下鉄開通記念 メリーゴーラウンド」(⑫)は、昭和9(1934)年に、心齋橋駅と大丸が地下でつながったことを記念したもの。それをコピーして組み立てた実物がこれで、くるくる回ります。かつて、朝ドラの「芋たこなんきん」でオープニングに出ていたものの原型。上が御堂筋で、下を地下鉄が走ってい



⑪『写真心齋橋』(昭和10(1935)年、心齋橋新聞社)と折り込み地図



大阪市中心標

⑩ 心齋橋筋案内 (昭和2(1927)年)
(通り名と百貨店・店舗等についての緑色文字は編集部による追記)



⑫ 梅田-大丸 地下鉄開通記念 メリーゴーラウンド
ペーパークラフト (昭和9(1934)年)

る。このとき、そごうは工事中。ところで、なぜ、梅田-心齋橋ではなく、梅田-大丸なのか。心齋橋の駅は、最初に開通したときは、いまより北側だけで、大丸と地下とがつながるのは少し遅れた。そ

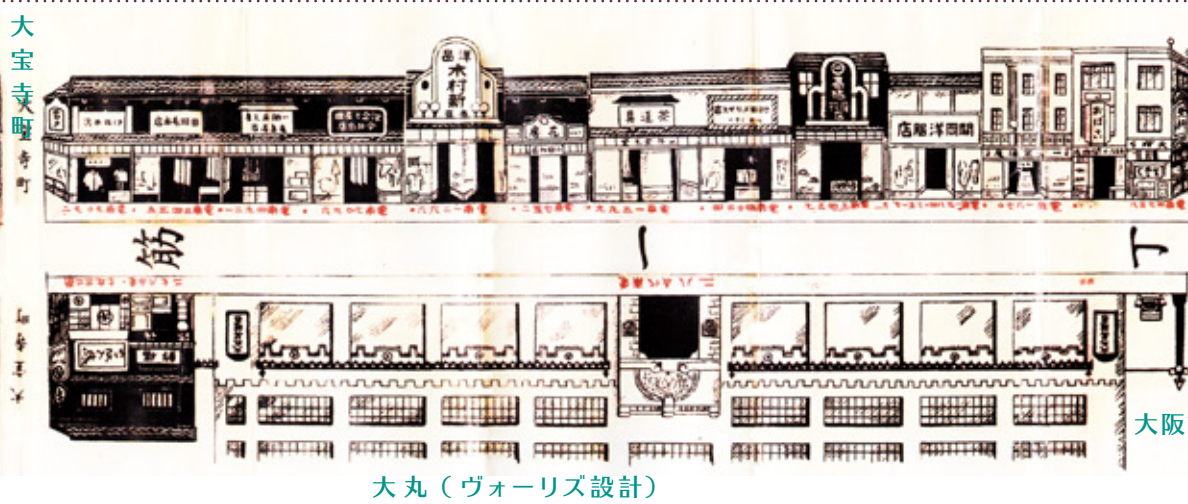
の開通記念だから、「梅田-大丸」。空には当時の飛行機も飛んでいる。

ヴォーリズ設計の大丸は、まず心齋橋筋側からつくられ、これは大正末に竣工しています。続いて御堂筋側も、御堂筋ができて地下鉄が通る昭和8(1933)年には完成している(⑬)。心齋橋側の入り口にある立派な孔雀のテラコッタは、大丸が火事で燃えたことがあるので、炎の中からよみがえる不死鳥、フェニックスをアメリカのタイル会社に依頼したら、ピーコックが来たという(笑)、そういう伝説がある。

⑬ 大丸 全館完成 店内御案内
(昭和8(1933)年)



そごう (村野藤吾設計以前の建物)



大丸 (ヴォーリズ設計)



⑨ 大阪心齋橋渡初式 絵はがき
(4枚組のうち2枚、明治42(1909)年)

この心齋橋の南から北を見た絵はがきの細部を、じっくり見ると、橋の北方に“ダイヤモンド”という看板文字が見える。橋の向こうは南船場。このあたりは北船場と違って、小間物系でかつ輸入品の業者が多かった。時計とか画材関係、音楽関係。そういうものが並んでいただろうと思います。

明治42(1909)年に石橋の心齋橋ができたときの組み絵はがき(⑨)では、祝典のアーチみたいなものを建てているのが見えます。このアーチは、次の日に風が吹いて倒れたそうです(笑)。南から北を見ていて、神主さんが来て渡り初めをしている。撮影中のカメラマンも映っていて、だんだん人が増えていく。

昭和2年の「心齋橋筋案内」をたどっていくと!?

かつての心齋橋は本屋街で、たくさんの出版社があった。いまは、そのイメージがまったく薄れてしまっているのはとても残念です。

昭和2(1927)年の「心齋橋筋案内」(⑩)を皆さんの手元資料にしています。同じ手法の戎橋筋のもあります。だから、長堀から難波の高島屋、南海電車までの街並みは全部これでたどれる。

この「心齋橋筋案内」には、三津寺筋と宗右衛門町との間の新屋敷筋が心齋橋に抜けるところの東側に「松村呉服店」があります(P9)。建物に赤く色が入って

竣工時の大丸は中央に巨大な吹き抜けがある壮麗な建物。大丸がよく出していたパンフレット代わりの双六でも、この吹き抜けのまわりをめぐる、あがりか上の特別食堂に2カ所あつたりします。これらは、多くは正月の配り物。

先に紹介した展覧会の際、ある女性が、自分の父は大丸宣伝部の金山新六で、当時のショーウィンドー写真があるということで、見せていただいた。心斎橋筋に面した側の写真で、大正末から昭和初頭の頃のもの。構成主義的と言うか、斬新でモダンなデザイン。照明が十分ではないので、ちょっと重厚な感じもする。表示には、「メートル法発布記念、昭和2年4月」というような文字が見えます。



⑭ 大丸の南東角にあった「大阪市中心標」(『大大阪画報』昭和3 (1928)年より)

大大阪の中心は 大丸の心斎橋筋側の角？

ちなみに、大丸において重要なものの一つは「大阪市中心標」(⑭)でした。これは、大阪市が周辺地域を編入して大大阪になり、大阪市のへその位置が

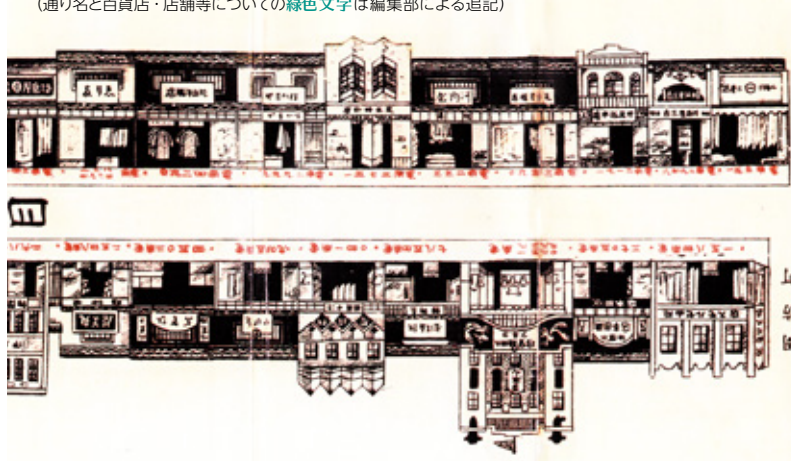
動いたということで、大丸の心斎橋側の角に新聞社が建てた。なぜ、ここがその位置なのかは分からないが、僕らが子どものときも、ちょうど大丸のこの位置に、女神像が立っていて、うちの親は、あれが大阪市の中心だといつも言っていました。けれども、しばらくしたら、大丸の工事のために女神像は戎橋北詰に移されました。大阪市中心標自体は、それ以前、戦時中に供出されています。いまのこのあたりは、のちに大丸が増築された部分のなか。大阪市の本当の真ん中はどこかというのは知りたい気はしますが、船場でもなくて、心斎橋の大丸の角というのは、何なのかと(笑)。今の中心はどこやと思います？ よくわからないが、考えると面白い。



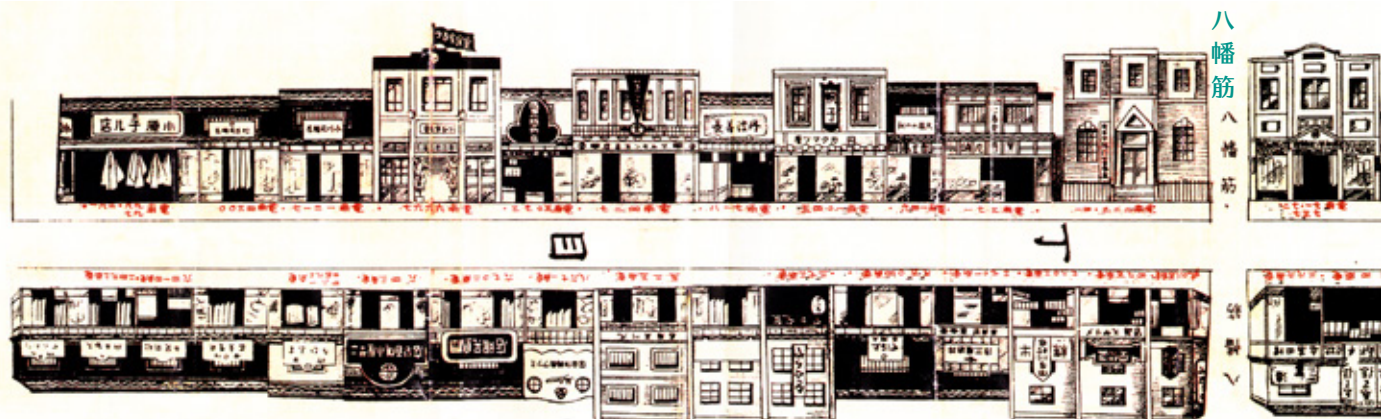
⑮ 村野藤吾設計のそごうとヴォーリス設計の大丸が並び立つ
※講演当日のスクリーン画像から

⑯ そごう大阪店 新築開店新聞広告(昭和10 (1935)年)
まんが展望では、特に女性の活躍が目立つ

⑩ 心斎橋筋案内(昭和2 (1927)年)
(通り名と百貨店・店舗等についての緑色文字は編集部による追記)



周防町
南防町



八幡筋
八幡筋

次にちょっと見方を変えて、画家の小出楨重が「上方近代雑景」という文章の中でこう書いています。「私は子供の如く、百貨店の屋上からの展望を好む。例えば大丸の屋上からの眺めは、あまりいいものではないが、さて大阪は驚くべく黒く低い屋根の海である」と。大丸の上から見ると、大阪の街にはまだそんなにビルが建ってない、黒い屋根の海であると。その中にある近代的な百貨店。

百貨店は地域における 文化啓蒙活動拠点だった

戦後の大丸について言うと、「水曜クラブ」という、文化サロンのなものをやっている。中心になったのが、泉茂、澤

野井信夫という大丸の宣伝部の画家たち。見学会や講演会を行っています。例えば、昭和33 (1958) 年には犬養孝が万葉集の話をしたり、今東光が選挙について、また藤山寛美が喜劇の間と息について話している。雑誌「水曜」(⑮)の題字を描いたのは京阪百貨店のポスターで知られるデザイナーの早川良雄。表紙は泉茂がやっていて、扉文字は榊莫山。雑誌には、大丸でやっている展覧会情報なども出ている。百貨店の地域における文化啓蒙活動という意識は、昭和30年代には高かったという気がします。

本に関して言うと、戦後すぐ、昭和20年代の百貨店には古本屋が入ってい

る。当時は新刊本が少ないからで、古本屋が百貨店から撤退するのは新刊がたくさん出るようになってから。それ以前、大丸に入っていたのは、「ほんや*おっさんどう乙三洞」で、森田乙三洞こと森田政信が店主。実は、数日前にその人の娘さんと話をしました。そういう、地域の文化の



⑮ 雑誌「水曜」

拠点としての百貨店という機能が、この頃にはあっただろうと思います。

そごうは「なにわ遊覧百貨店」

一方のそごうは、^{そごう いへえ}十合伊兵衛が天保元 (1830) 年に坐摩神社前の古手買い (古着屋)「大和屋」を開業したのが始まり。大正11、12 (1922、23) 年頃から、日本の美術でもアバンギャルドの流れが入ってくる。例えばイタリアからの未来派。その当時の記録には、そごうのショーウィンドーの飾り付けにも未来派の影響が出てきていると書くものがあります。

村野藤吾設計のそごう心斎橋店は昭和10 (1935) 年に完成。ここでも、そごう対大丸のせめぎ合いが続いていました (⑯)。

大丸は水晶塔をつくり非常に派手。そごうは御堂筋側の壁面に「飛躍」の像 (⑰) を置いた。

エレベーターは、島野三秋の漆螺鈿の扉。これは、溝口健二の映画「浪花悲歌」にも登場している。山田五十鈴主演で、昭和11 (1936) 年の公開。建物ができた直後で、エレベーターの中も出てくる。大理石とガラスの城というのが、そごうの建物の売りで、上野リチの装飾ガラスも使われた。もう一つ、キャッチコピーが“お遊びに お買い物に”というもので、“なにわ遊覧百貨店”のコンセプトは、平成そごうの心斎橋本店再オープンの際にも受け継がれた。

昭和10 (1935) 年の広告に描かれて

いる「新・大・そごう まんが展望」(⑱)で分かるのは、そごうは女性が活躍する百貨店のイメージがあったこと。グッシェルという、イタリア人女性のシェフがいる特別食堂とか、有名な女性写真家の山沢栄子のスタジオがあった。村野藤吾という建築家は、自分の作品に他のアーチストの作品を置く。「飛躍」の像は藤川勇造が作者。フランスへ留学してロダンの助手をした人だが、像の完成前に急死し、その後は、弟子たちが引き継いだことも分かっている。

実は「30度」というのが、村野藤吾のキーワード。道が狭い割に建物が高い市街地の建築は、昔の広場の建築とはだいぶ異なっているという。つまり、



⑰ そごうの御堂筋側の壁面に設置された「飛躍」の像



歩きながら建築を見るので、視覚はだいたい30度に限られるというのが村野の考え。確かに、真正面から見ると、そごうも縦に筋が並んでいる感じだが、斜めの角度だとストライプがしまって見える。そういう感じのことかもしれない。

そごうの「飛躍」の像は商神メリクリウスか？

「飛躍」の像について、長谷川堯という建築史家が、これはローマの商売の神様メリクリウス (Mercurius) で、村野藤吾が商売の飛躍を祈って贈ったのだと言っている。でも私は、実際はメリクリウスではないだろうと考えている。

そごうには、翼の生えた若者の図像の源流というのがある。例えば、昭和6

(1931)年のそごうの社員運動会パンフレットの表紙にも、似たような若者像がある。そういう流れで、人間に翼をつけた像を造ったのではないか。そごう特別食堂にあった藤田嗣治の壁画にも翼のある女神像が出てくるが、あるいは、これと対になっているのかもしれない。

一方で、近代大阪における翼のある風景というのがある。例えば南海電車の昔の社章の羽車。それらは、メリクリウスとどう違うのか。メリクリウスはヘルメスのことで、商売の神様。カドゥケウスという蛇が巻き付いた羽の生えた杖を持っているし、帽子やサンダルにも翼がある。一方、「飛躍」の像では、翼はベルトで胸に取り付けられているので、これは多分人間。人間に翼をつ

けてイメージを展開している。

ただ、大阪人にとってメリクリウスは非常に重要なもの。中央公会堂の正面ドームの上にもメリクリウスの像がある。大正14 (1925) 年の「大大阪記念博覧会」のポスターにも、メリクリウスのような若者が短いカドゥケウスを持っているのが描かれている。

大阪市大の以前のマークは、このカドゥケウスの杖を意識したものだった。関一が出た東京高等商業学校も同様に、全国的に高等商業学校ではカドゥケウスの杖を使ったデザインが多い。戦後では、大阪万博の際、イタリア館に「メリクリウス」像がきたが、現在は大阪のマーチャンダイズ・マートビルの前にその複製がある。



⑳ 浮田五龍圓のウキタミンのチラシ

いまま心斎橋北にある「春木眼鏡店」。『写真心斎橋』の写真では店内にバウハウス風のモダンな椅子が並んでいる。傘の「うさぎや」に、「藪内時計店」。

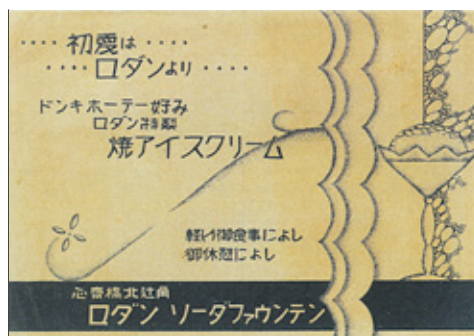
「浮田五龍圓」は薬の販売 (㉔)。“下痢にウキタミン、汽車に赤旗 すぐ止まる”(笑)。こんな宣伝は、いまの時代



㉑ 喫茶キューカンパーのチラシ
人と話ができるのは、九巨鳥か？
店内が静かだからか？

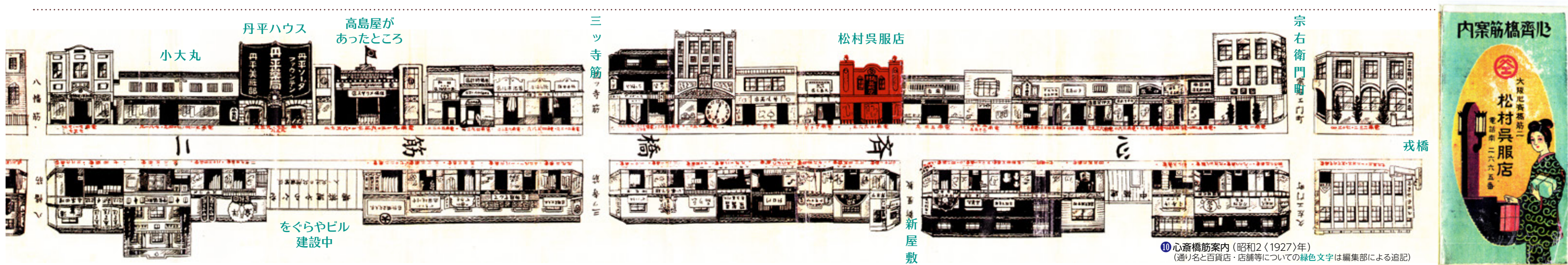
には難しい。

食べ物屋では、「森永キャンディストア」。「キューカンパー」は“人と話の出来る”喫茶店 (㉑)。心斎橋北辻角「ロダン



㉒ ロダン ソーダファウンテンのチラシ

ソーダファウンテン」(㉒)の人気商品は特製「焼アイスクリーム」。朝ドラ「ごちそうさん」に出ていた焼き氷のモデルか？移動カフェ「ノアノア」。「ノアノア」というのはゴーギャンの自伝的な本の名で、絵描きの眞島豪がやっていた屋台のバー。「心斎橋食堂」の“三階ちん座席”は“大阪の真中で山行の気分が



高島屋は心斎橋から長堀橋、さらに南海高島屋へ

百貨店に関して付け加えると、一時、心斎橋筋二丁目に高島屋がありました。元は「丸亀屋呉服店」があったのですが、店主の田村太兵衛という人が、明治31 (1898)年に初代大阪市長になった前後に、ほぼ居抜き状態で高島屋が入っています。

高島屋は、京都で有名画家による「現代名家百幅画会」を開催していたが、大阪でやったらよく売れた。大阪の方が美術品を買う人がいるということで、美術部を設立したことが『高島屋美術部五十年史』(昭和35 (1960)年)に書いてある。



㉓ 高島屋名物十銭均一店のチラシ
現在の“100均”の先駆け

このあと、長堀橋の交差点の南東、少し前まで丸善石油のビルがあったところに長堀高島屋 (㉓)を出す。この丸善石油のビルを壊すときに、古い建物の痕跡がかなり残っていたそうで、高島屋のビルをもとにして、周囲をつくったのではないかと、大阪歴博の建築史の酒井

一光君が言っていました。

大阪では、堺筋に百貨店のラインができ、のちに御堂筋に地下鉄が通るのに合わせて、御堂筋にシフトしたとよく言われます。高島屋でも、長堀橋に店がありながら、のちに南海高島屋を御堂筋の南端に出店することになります。

心づら気分で商店街をひとめぐり

心斎橋筋にこんな店があったということを、昔の写真やチラシで紹介します。まず、いまま残る老舗の「小大丸」。また、扇の専門店「みのや」、中村鴈治郎の人形で有名な久留米餅の専門店「くるめや」に、履き物の「てんぐ」。

する!”という。「喜久屋食堂」は宗右衛門町の角にあった、庶民派の15銭均一料理店。このほか、「つる家食堂」、「電気食堂」に、長谷川一夫経営のフルーツパーラー「蝶屋」。

戦前のチラシで節分の恵方巻きを宣伝していた「福寿司」は、最近になって閉めたようでとても残念。「自由軒」も、千日前のみが自由軒にあらず、大宝寺にもあった。また、スッポン・ソップの宅配で有名だったのが料亭「播半」。

織田作之助が“大阪の故郷”と呼んだ汁屋

肥田皓三先生がすごく大事だとおっしゃるのが、「しる市」。これは心斎橋の

そごうの東に入ったあたりにあった。大正時代の麻生路郎の「一ト昔前的大阪見物」や、織田作之助の随筆「大阪発見」、小説「夫婦善哉」にも出てくる。「大阪発見」で、「戎橋そごう横の『しる市』もまた大阪の故郷だ」と、心斎橋筋と書けばいいのに、オダサクは戎橋と書く。「白味噌のねっとりした汁を食べさず小さな店であるが、汁のほかに飯も酒も出さず、ただ汁一点張りに商っているややこしい食物屋である。けれどもこの汁は、どじょう、鯨皮、さわら、あかえ、いか、蛸その他のかやくを注文に応じて中へいれてくれ、そうした魚のみのほかにきまって牛蒡の筐がきがはいって、何ともいえず美味しいのである」と。

客については、「開襟シャツなどを着込んだインテリ会社員風の人が多い」とオダサクは書いている。小腹が空いた人がちょっと寄るような場所だったらしい。それがそごうの位置あたりにあるのが微妙なところ。きつと船場あたりの人が、長堀を越えると、ちょっと紛れて、人の目を気にしないでいいというものもあったのだろう。

大阪が大大阪になった頃に、漫画家の岡本一平が朝日新聞に15回連載で描いたのが「大大阪君似顔絵の図」。その連載最後の日に、もうお別れだからと、大阪朝日の人と汁屋に行こうとなったが、この汁屋でお金を使いすぎて、梅田まで歩いて行ったという話も残っている。

丹平ハウス、をぐらやビルは 美術と文芸の拠点

心斎橋の重要な文化拠点としては「丹平ハウス」。これは丹平製菓がつくったもので、大正8（1919）年に隣の高島屋の火事で類焼したあとに建て替えてビルになった。丹平ハウスの1階はソーダファウンテン^㉓。



㉓ 丹平薬局、ソーダファウンテンのチラシ
カウンター後ろの絵は赤松麟作画の「静物」

カウンターの後ろには洋画家・赤松麟作の絵が架けられていたが、それは赤松の洋画研究所が階上にあったから。同様に丹平写真倶楽部がこのビルにあったことでも知られている。

斜向かいにあったのが「をぐらやビル」。このビルは今も残っている。上階は、心斎橋の店主等の社交クラブになっていて、通り越しに丹平ハウスの上の写真家たちとやりとりしたという話も残っている。

をぐらやは、落語の「三十石」に出てくる鬢付け油の老舗。昆布の「小倉屋」はここからのれん分けしたという。当時ののれん分けでは、主家より盛んになってはいけなかったので、同じ商売はさせなかったという。日本海を通して鬢付け油を運んだ船を使い、昆布を商ったということらしい。

をぐらやビルの中でユニークな商売をしていたのが「ショップガイド社」。札をかけている加盟店に行くとカードで買い物ができる。ネットでつながっているわけではないので、少年自転車隊が巡回して処理をした。いわばカード決済の先駆。「ショップガイド」という本もあって、川柳関係の「番傘川柳社」の人が編集に関係しており、文芸や美術的な内容も掲載

していた。その一人、岸本水府は「一粒300メートル」のキャッチコピーをつくった人で、田辺聖子さんの『道頓堀の雨に別れて以来なり』という評伝に詳しい。

竹久夢二の版画で知られた「柳屋」は、心斎橋筋の1本東の通り、畳屋町八幡筋にあった。ここでは、未来派や表現派の手ぬぐいも売っていた。

「播磨屋呉服店」の店主、岡田播陽は文筆家でもあった。彼の著書の『大衆経』^㉔の表紙には、怪獣みたいな人物が描かれている。この人の息子、岡田誠三は昭和19（1944）年に直木賞をとった人。父をモデルにした『自分人間』という作品もある。



㉔ 岡田播陽著「大衆経」の表紙
（昭和5（1930）年、平凡社）

「三木楽器」では、昭和7（1932）年に山田耕筰がホールで作曲講座を開いた際の写真も残る。大阪は楽譜の産地でもあった。このほか、戦前には女性編集長による「粋」^㉕という雑誌もあり、当時の百貨店の関係などがよく分かる。「心ぶら考現学」などの記事もあり、しゃれていた。ところが、こういう大阪はやがて滅んでいく。



㉕ 雑誌「粋」創刊号（昭和11（1936）年）

焼け野原になってしまった モダンシティ大阪

昭和10（1935）年に御堂筋で防空演習をしているときの写真がある^㉖。背景には、そごうと大丸が見えている。

この10年後、大阪は焼け野原になってしまった。



㉖ 「壮烈・阪神防空大演習」
（「写真特報 大阪毎日」第68号、昭和10（1935）年）



㉗ 空襲による被害直後の御堂筋

当時の南中学校、いまのアメリカ村のビッグステップから撮った写真には、その焼け野原の中にそごうと大丸が建っています^㉗。

大丸は一部が焼けたため、結局、進駐軍には接收されなかった。逆に、この時に無事だったそごうは接收され、難波の地下鉄のところなどで仮営業を余儀なくされ、その故に出遅れることになりました。



質疑 & 持ち寄りトーク

司会 コレクション、実物があるということが、記憶を呼び覚ます手がかりとして本当に重要だと、お話を聞きながら改めて思いました。皆さんもいろいろな記憶を持っていらっしゃると思います。ご自由にお話してください。



会場1 心斎橋のほうで、祖父が戦前に店を出していたそうです。私が10歳にいかないときに、その当時「みうら」という呉服店があったところの前で、母が「ここが、おじちゃんがお店を出していたところよ」と教えてくれました。骨董品とか、舶来ものを扱っていたそうです。場所がはっきりしないので、いまま気になっています。

会場2 家内が阿倍野に住んでいたので、百貨店の包装紙をしまっておいて、どこかに残っていたのが突然出てきました。30年くらい前のものですが、「上町台地今昔タイムズ」3号に提供させていただきました。

私は西中島に住んでいたので、行くのはほとんど阪急百貨店でした。大食堂の円形テーブルで、真ん中に湯飲みが逆さかに置いてあって、相席で8人か10人か。それが一番の思い出。それから、阪急の2階の「風車」というパーラーは、歩道橋から入るところにあったんですが、下の方にそごうのパーラーがありました。ちょうど新梅田食堂街のところ、よく行った記憶

があるのですが、なぜそんなところにあったのか、いまだに不思議な感じがします。橋爪 私も子どものときに行きました。そこに、そごうがあったのは間違いありません。そごうの社史を調べたら分かるかと思います。今の阪急百貨店の北側というか、JRの高架下の横断歩道を渡ったあたりだと思う。

会場3 私は、玉造に住んでいまして、そこから幼稚園の頃に、73～74年前の戦時中のことですが、百貨店に行くという本当にわくわくしました。玉造から市電に乗り、上町台地を越えて、末吉橋まで行きますと、交差点の手前に陸橋があります。末吉橋の交差点を越えると、長堀川がずっとあった。そこから市電がまっすぐ行くけれど、川岸に歩道がない、川べり一杯に市電が走っていた。心斎橋に着くと、本当にわくわく。南に向いて、心斎橋を渡ると、橋の下に牡蠣船があったのを覚えています。

橋爪 僕の家は末吉橋の交差点の近所でした。話に出た陸橋の高津原橋の北には昔映画館があって、子どもの頃にそこで怪獣映画を見た記憶があります。長堀の角には時計台があって、肥田皓三先生もよく言われるんですが、夜になると鐘が鳴った。僕も聞いた記憶があって、でも先生の話聞いて錯覚した可能性もなくはない（笑）。懐かしい。わくわくするというのはよろしいですね。

会場4 長堀と言えば、戦後のことになりますが、私も子ども時分に、四つ橋の出初め式に父親に連れられて何度か行きました。その足で、心斎橋筋や百貨店にも行った思い出があります。

会場5 心斎橋筋と堺筋は、江戸時代の地図でも、道がずっと通っていて、橋もあり、昔から人通りが多い通り。百貨店の

動きですが、はじめ心斎橋に出していた店が堺筋に移り、大大阪の時代には、三越、白木屋、高島屋、松坂屋と4つの百貨店が堺筋に並んでいたと言いますね。橋爪 日本橋が公儀橋で、紀州街道、その延長で堺筋があった。ただし、大川を渡るのは、後の話。大正くらいに延伸して、架けかえて市電が通る「新」難波橋になった。本来の難波橋は1本西に架かっている、今のように通り抜けていたのではなくて、行きあたっていた。一方、心斎橋筋には繁華街としての歴史があった。もつと古い時代、坐摩神社からの東西の通りがぐっと曲がって繁華街が戎橋の方へ南に向かって進んでいったというように言われています。

心斎橋筋は、戎橋から北にずっと続くが、井池は違う。周防町から南は畳屋町で、そこから北が井池だという説がある。昔は、道があつてそれを挟んだ両側町で自治組織になっていた。それで考えていくと、メインが「通り」で脇が「筋」だとも言える。船場のメインは東西だから御堂筋はもとは脇道で筋。それが、旧南区島之内に行くと、畳屋町とか千年町とか、メインが南北の通りやから、その脇の筋が八幡筋とかになる。そうではないかと私は思っています。

会場6 私は高島屋大阪店に入社後、店内営業に配属、途中で宣伝部に行かされた。まるで別世界で、こんなところには、最初はおられへんと思ったんですが、こちらから企画して、それをお客さんに発信して、来てもらうということも大事だと次第に分かってきました。今日改めて、いろいろなことを思い出しました。それから、堺に利休と与謝野晶子の記念館ができますが、与謝野晶子は高島屋の呉服部の着物とかにも関係されていますね。



橋爪 高島屋はとても重要。高岡徳太郎という洋画家がバラのデザインをした。初期の院展とかも心齋橋の高島屋でやっています。それから、現在の高島屋東別館は昔の松阪屋で、名品がいっぱい展示されている。NHKの朝ドラ「カーネーション」でも、心齋橋百貨店と称して、撮影に高島屋の東別館が使われていました。

晶子^{つねこ}の話は、北野恒富の美人画などでしょうか。貼ったらすぐなくなったという有名なポスター。恒富は院展を代表する画家で、著名な美人画家。ここ高津宮とも関係がありますね。

会場7 私は、この会場の高津宮の宮司です。北野恒富の筆塚が参道にあります。書は恒富の友人だった俳人・河東碧梧桐^{かわひがしへきごとう}によるもので、昭和34年に建てられました。ぜひ一度ご覧ください。

会場8 両親が高島屋で結婚式を挙げたということで、小さな写真が残っています。拡大して持ってきたのですが、本当に高島屋でしょうか。アーチが写っています。「昭和22年5月」ということですが、両親ともに亡くなってしまっているのです。

会場6 現在の大阪球場通りにエレベーターがあって、私が高島屋に入ったときにはもうなかったのですが、5階に結婚式場がありました。実は私が高校時代、姉がそこで結婚式を挙げたので、覚えています。間違いないです。

橋爪 窓の形から見ても、多分そうですね。

会場9 私は包装紙を止めるシールなどを持ってきています。近鉄のは3色。専門大店のシールや松阪屋のものも。

橋爪 シールもお店によっていろいろあり、今となっては貴重ですね。

会場10 実は、うちの親父は道頓堀の「ドウトン」で働いていたんです。僕がまだ生まれる前のこと。最近、その頃の父

の日記が見つかったのですが、あの辺でよく遊んでいたみたいで、喫茶「アメリカン」によく行っていたようです。いまま残っていますね。

橋爪 「アメリカン」の中のオブジェみたいなものは、芸術家の森村泰昌さんのお気に入りです。何年前の『大阪観考』という本でも訪ねました。食堂ビル「ドウトン」は村野藤吾が建てたもの。内部は、昔のそごう1階に少し似ています。外観は川側から見たのと道路側から見たのとで感じが大きく変わります。



会場11 私自身は先生と同世代ですが、そごうで山沢栄子さんが写真館をしていたことを初めて知りました。仕事先の天満橋ドンセンターの7階ホールにも山沢さんの作品があります。それとは別に、上本町で私の祖父母が料理旅館をしていました。近くにあった近鉄百貨店の重厚な建物が今でも目に焼き付いています。また、祖母の弟が心齋橋のそごうの隣で、心齋橋パーラーをしていました。清水町でも料理旅館をしていて、上本町と心齋橋とを毎日行き来していました。昭和30年代のことですが、懐かしく思い出していました。

橋爪 山沢栄子がそごうでスタジオを

もち、グッセルという女性のシェフが特別食堂にいた。ちょうどそのあたりで、大阪市の地下鉄も女性の車掌を採用しているのが「大大阪観光」という映画にも映っています。まさに女性が社会に出てくる、ちょうどタイミングがあるのでしょうか。美術に関しては、島成園や北野恒富の弟子をはじめ、女性画家が大阪は強かった。明治末、大正くらいからずっと展覧会で活躍しています。

それから、美術の話では、大阪の戦後の現代美術で具体美術協会があります。吉原製油の社長でもあった吉原治良が創設者。本拠地である「具体ピナコテカ」は中之島にあったが、公開制作を心齋橋の大丸の屋上でもやった。もう一つ、「インターナショナル・スカイ・フェスティバル」を、昭和35（1960）年に難波の高島屋でやった。自分らの絵を拡大したものをアドバルーンにつけて上げた。その当時の百貨店は、今以上に文化発信拠点としてそれぞれ競っていたと言える。具体美術については、近年世界的に再評価され、ニューヨークのグッゲンハイム美術館で2年前に大回顧展が開催されています。

ついでに、フェスティバルホールの外壁のレリーフ、これは行動美術の作品です。これができた昭和33（1958）年に、東京では東京タワーがつくられている。映画「三丁目の夕日」の世界。その時代に、大阪ではこういうものをつくっていた。同じ年にできた建物が、村野藤吾の新歌舞伎座。千鳥破風の上の飾りは、辻晋堂という彫刻家がつくったもの。これは、歌舞伎の「暫」^{しげ}の隈取りからとったものです。この昭和33年に、大阪では、2つの劇場がキタとミナミにできたわけ


梅田のそごうパーラーについて 〈後日談〉 ご参加された方から、数日後にいただいたメール（概略）を紹介します。

■ 梅田のそごうパーラーのことは、おそらく20年以上忘れていた話です。橋爪先生のお話を聞いている間に昔のことをいろいろと思い出しました。

イベント終了後、年長の方お二人からお声掛けいただき、その中のお一人からの情報としては、そごう百貨店は戦後進駐軍に損取されたので代替施設として難波と梅田に小さな店を出したそうです。

図書館に行き、橋爪先生のアドバイスど

おり、そごう百貨店の社史を見ました。

社史によると、私の記憶の中にあつた梅田の「そごうパーラー」は昭和25（1950）年7月1日に地下鉄梅田駅構内で開業との記述がありました。地下鉄の駅の構内という点では少し場所がちがうのですが、確かに梅田にあつたことは間違いないようです。その他に、心齋橋そごうの代替施設として、次の4か所で一時営業していたことが分かりました。

〈本部〉 肥後橋の大同生命ビルの1、2階
 〈そごう難波店〉 地下鉄難波駅構内
 〈梅田〉 阪神梅田駅前の阪神別館の一部
 〈そごう阿倍野店〉 阿倍野筋

また、隣におられた方が高島屋のOBということで、かねてから疑問であった高島屋大阪店7階に展示されている岡本太郎氏のタイル画についてお尋ねしたところ、電話で御丁寧な回答をいただきました。いろいろなお縁をいただいて感謝します。